



# 未来をつくる ソーシャルイノベーション 第2部

文・西村勇哉

暮らしの中から見つける変化の力

CASE:

51

## 祈り—人々が集まることで新たな暮らしの形が生まれる—



伊勢神宮では、690年に第一回の式年遷宮が行われて以来、1300年にわたって20年に一度の移動と建て直しを繰り返しながら、祈りの場として継続してきた。©PIXTA

POINT!

祈りの場が人々が集まる理由を生み出し、新たな暮らしのサイクルを生み出すことで、社会構造の変化につながった。



ギョベリク・テペ遺跡。巨大な石の柱を100〜500メートル動かすためには500名以上の参加が必要だと考えられ、農耕以前の先土器新石器時代に大規模な組織的工事が行われていたことを示す。

©Teomancimit (CC BY-SA 3.0 <<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>>)

今回は、「人々が集まる」力について、祈りと集住の歴史を見ていきます。従来の歴史では、人間は農耕を覚えたことで集住・定住を始め、結果として都市やその後続く分業と様々な文化とテクノロジーの発展が起こったと考えられていました。

ギョベリク・テペは、トルコ南東部にある宗教遺跡です。1996年からクラウス・シュミットが率いるドイツ考古学研究所のチームによって発掘が行われ、1万4000年前から1万5000年前の遺跡であることが示されています。これは、農耕が本格的に行われる1万2000年前から1万年前に先立ちます。ギョベリク・テペには、完全な定住の痕跡はありませんが、部分的に暮らしを営んでいたことを示す住居跡が見つかっています。つまり、人々は、農耕が始まる前に、祈りを捧げるために集まり、部分的な集住を行っていました。集住・定住の起源は農耕ではなく、祈りにあります。

脳科学の研究によると、祈りは、神の概念とともに生まれ、その起源は、脳の発達によって人類が自伝的記憶を手に入れたことで、過去・現在・未来という時間軸を手に入れ、夢に現れる過去の偉人や何かに秀でた祖先の存在を現在のものと捉えることで生まれたと考えられています（『神は、脳がつくった』E・フラー・トリー著）。そして、狩りに優れた祖先に狩りの成功を、産



にしむら・ゆうや ●NPO法人ミラツク代表理事。大阪大学大学院にて人間科学の修士を取得。人材育成企業、財団法人日本生産性本部を経て、2008年より開始したダイアログBARの活動を前身に2011年にNPO法人ミラツクを設立。Emerging Future, we already have(すでに在る未来の可能性を実現する)をテーマに、全国横断型のセクターを超えたソーシャルイノベーションプラットフォームの構築と未来潮流に基づいた新規事業創出のためのプロジェクト運営に取り組む。  
<http://emerging-future.org>

後健康を維持した祖先に産産の成功を祈り、それが習慣化したことで1000年単位の年月が経つ中に表れたのが、形式化された祖先としての原初的な神の概念と考えられています。

従来、農耕の発明によって集住・定住が始まったという考え方が一般的だった背景には、農耕のほうが狩猟採集より生活基盤として優れているという考え方がありました。一方で、現代では、農耕よりも狩猟採集のほうが、労働時間が短く、多様な食材に支えられた安定と健康を保ち、個人の摂取カロリーも多かったことが分かっています。今では、狩猟採集から農耕への移行は、気候変動に伴う獲物の減少などの厳しい条件への適応として、仕方なく起こったものだと考えられています。

人は、祈りの場によって集住の原点を手に入れました。その後、集住が定住となり、都市が生まれ、現代へとつながります。現代社会を支える大きな移行は、祈りの場への集合によって始まりました。